

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 けい あなん 邢 亜南

本論は、日本語とドイツ語で執筆する作家多和田葉子の初期作品について、身体、言葉、物語という三つの主題が交錯している様相を「変身」という観点から明らかにしたものである。三部十章構成による本論では、デビュー作„*Nur da wo du bist da ist nichts*“ (1987 年) から『変身のためのオピウム』(2000 年) までの十作品が分析対象となっている。

第一部「身体の変身」では、初期の三作品を対象にして、身体の変身という観点から議論が進められる。初期散文「絵解き」において、その後の作品で顕著になる移動、夢、人形というモチーフが現われていることが確認されたのち、『*Das Bad*/うろこもち』では舌の喪失が言葉の喪失に通じ、身体の変容と言語の密接な関係が指摘される。「かかとを失くして」では異国体験を通しての身体変化が眼差しと深い関係にあることが示される。

第二部「言葉の変身」では、翻訳の観点から三作品の分析がなされる。「無精卵」では、観相学の観点から顔・仮面というモチーフが分析されるとともに、それらとトラウマ体験の言語化の関係についての指摘がなされる。自作翻訳の要素もある『ゴットハルト鉄道』では、意味の伝達だけではなく、既定の枠組みや二項対立から脱する方策として翻訳が機能している点が明らかにされる。『文字移植』では翻訳の過程で翻訳者自身が変身する点に着目し、『黄金伝説』などの他作品を参照しつつ、翻訳における身体性が考察される。

第三部「物語の変身」では、間テクスト性の観点から、民話や神話等の書き換えが検討される。異類婚姻譚の民話を題材にした「犬婿入り」、能『隅田川』と永井荷風の『湊東綺譚』を採り入れた「隅田川の皺男」、「聖書」のパロディとしての『聖女伝説』、オウィディウス『変身物語』を参照した『変身のためのオピウム』の分析を通して、異なる地域、時代の複数の声や視点を導入することで、従来の物語に隠された声を可聴化させる特徴や、価値観、視点の差異を顕在化させる点があることが指摘される。

他作品との関係性を掘り下げる可能性や、章と章の間の叙述を精緻にする余地があることなどの課題はあるものの、全体として本論は、多和田葉子の初期作品における特徴を的確に捉え、とりわけ「変身」が身体だけではなく、言語および物語の様相においても深い関係があることを明らかにしている。また多和田の日本語、ドイツ語作品を丁寧に読解し、作家論としての側面を有しているだけではなく、ヨーロッパ、中国、日本の様々な文学作品との関係性も提示され、比較文学的な観点からも評価されるものとなっている。

以上の点から本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。